日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第 132 号　2015 年 9 月

他者軽視傾向と一般的パーソナリティ
――ビッグファイブとの関連の性差に注目して――

小　平　英　志

Abstract

Past studies have indicated a positive relationship between the tendency to undervalue others with lack of coordination and emotional instability. However, gender differences in this relationship have remained unexplored. Therefore, the relationship between undervaluing others with differences in gender and Big Five personality traits was investigated. Participants were Japanese university students (*N*=281). Big Five personality traits were assessed by using FFPQ-50 (Five Factor Personality Questionnaire 50-items) and TIPI-J (Japanese version of the Ten-Item Personality Inventory). Correlation analysis and multiple group structural equation modeling were conducted on the scale scores. Results indicated that undervaluing others was negatively related with agreeableness (attachment), which supported findings of previous studies. Furthermore, undervaluing others and conscientiousness (controlling) were positively correlated in women, but negatively correlated in men. Moreover, female participants with high undervaluing others scores and high self-esteem scores had the highest conscientiousness score. These results suggest overestimating of the conscientiousness would occurred from highly undervaluing others on women. The dissatisfaction with others in women with high self-esteem is discussed.

キーワード：assumed-competence, undervaluing others, Big Five, gender differences

仮想的有能感と他者軽視傾向

速水・木野・高木（2004）によると，現代青年が抱く有能感は 3 つに分類することが可能であるという．第一が，多くの成功経験を経て比較的妥当な自己・他者評価の結果に得られる有能感，第二が，実際にはさほど成功の経験をしていなくとも自己評価の甘さや誇大評価によって得

られる有能感，第三が自身の実績とは無関係に，他者の評価を下げることによって得られる有能感である（速水，2012）．第一の有能感は真の有能感とも呼べるものである．一方で第二と第三の有能感は，いずれも認知のゆがみによって生じる有能感であり，前者が自己の過大評価（自己愛傾向）によるもの，後者が比較対象である他者の過小評価によるものである．速水他（2004）はこの第三の有能感に注目し，現代に特徴的な自己高揚のあり方として，仮想的有能感（assumed-competence）という概念を提唱した．仮想的有能感は“自己の直接的なポジティブ経験に関係なく，他者の能力を批判的に評価，軽視する傾向に付随して習慣的に生じる有能さの感覚”と定義される．仮想的有能感の傾向は，他者軽視傾向を測定する尺度（仮想的有能感尺度）によって推測が可能であるとされ，これまで 11 項目からなる尺度を用いて，数々の実証的研究が行われてきた（ex. 藤井・上淵，2011; 速水・小平，2006; 小塩・西野・速水，2009）．

これまでの研究では，他者軽視傾向との関連を検討するだけでなく，自尊感情との組み合わせによって分類を行う有能感類型を用いて統計学的に解析を行ったものも多い（ex. 安藤，2006; 速水・小平，2006; 小平，2014; 小平・青木・松岡・速水，2008; 高木・山本・速水，2006）．有能感類型とは，他者軽視と自尊感情がともに低い萎縮型，他者軽視が高く自尊感情が低い仮想型，他者軽視が低く自尊感情が高い自尊型，他者軽視と自尊感情がともに高い全能型からなる．このうち，他者軽視が高く自尊感情が低い仮想型は，他者軽視による自己高揚は起きているものの真の有能感が得られていない個人であると解釈可能であり，仮想的有能感の概念上，もっとも注目すべき類型であると考えられている（速水他，2004; 速水，2006）．

これまでの多くの先行研究は，他者軽視傾向が高い青年たち，とりわけ仮想型の青年たちが不適応の状態にあることを示してきた．例えば，高校生の学業的コミュニケーションに注目した小平・青木・松岡・速水（2008）では，他者軽視傾向が高い個人ほど，教師の教え方のまずさや試験の結果がよくなかったクラスメートについて話題にする傾向にあり，自身が学業で困った際にはクラスメートや先生に援助を求めないことが示されている．また，大学生の聴くスキルと他者軽視傾向との関連を検討した久木山（2012）では，他者軽視傾向が高いほど相手の意見に関心を示すことが困難で，中立的に話を聞くことも苦手であることが示されている．さらに小平（2014）では，政治的自己効力感と政治関与行動との関連が検討された．特に政治に関心が高い大学生において，他者軽視傾向は自分が政治に関わる資格があるという「政治関与の資質」に関する自己効力感を高める一方で，どうせ行動を起こしても政治には反映されないとの「政治に対する無力感」をも同時に高めるという結果が得られている．

他者軽視傾向と一般的パーソナリティ

では，そもそも他者軽視傾向が強い青年は，どのようなパーソナリティ傾向にあるのだろうか．他者軽視傾向と一般的なパーソナリティ傾向との関連を検討したものに，山田・速水（2004），高木（2006），鈴木（2010）がある．山田・速水（2004）は専門学校の学生を対象に，16PF（Sixteen Personality Factor Questionnaire）を用いて他者軽視傾向との関連を検討して

いる．16PF は 187 項目からなる一般的パーソナリティを測定するテストである．この研究では，測定された 16 の性格特性のうち 3 つの特性で，他者軽視傾向との間に有意な相関関係が認められた．3 つの特性とは，C 因子，M 因子，L 因子であり，他者軽視傾向は，情緒安定性に関わる C 因子，空想的・現実への無頓着さを示す M 因子と負の相関関係，協調性のなさや疑り深さの L 因子とは正の相関関係にあった．また，16 の性格特性の上位特性である二次因子についても検討を行ったところ，意識レベルでの不安傾向を示す Q Ⅱ因子との間に正の有意な相関関係が認められた．すなわちこの研究では，他者軽視傾向の高さは，情緒的な不安定さや他者への猜疑心を主とする協調性の低さ，空想的傾向や創造的傾向の低さとかかわりが深い点が示されている．

同じく他者軽視傾向とパーソナリティとの対応関係を検討した高木（2006）では，Y-G 性格検査が用いられた．大学生を対象とした調査の結果，Co（非協調性），Ag（攻撃性），N（神経症傾向）と他者軽視傾向との間に正の相関関係が確認されている．攻撃性については，他者軽視傾向が高いほど，攻撃性や怒りの感情経験が高まることが他の研究でも指摘されている（Hayamizu, Kino, Takagi, & Tan, 2004）．また，協調性のなさ及び神経症傾向が他者軽視傾向と関連していた点は，先の 16PF の L 因子と C 因子が関連していたという山田・速水（2004）の結果と対応していた．それぞれ使用したパーソナリティ・テストに違いはあるものの，他者軽視傾向が協調性の低さと神経症傾向や情緒の不安定さと関連する点では，ほぼ共通して報告されていると言えよう．

他者軽視傾向の高い青年の協調性の低さについては，共感性を取り上げた研究においても同様の結果が得られている．鈴木（2012）は，他者志向的な共感性と他者軽視傾向が負の相関関係にあることを示しており，他者の視点の取得や他者の気持ちになるといった共感性に乏しいからこそ他者を軽視することが可能であることが指摘されている．また，神経症傾向や情緒不安定については，1 週間の感情経験を調査した小平・小塩・速水（2007）でも他者軽視傾向の高い個人の精神的な不適応状態が示されている．この研究では，他者軽視傾向が抑うつ感情，敵意感情の経験レベル（強さ）と関連していることが認められた．さらに敵意感情の変動の大きさ（1 週間の報告の標準偏差）とも正の相関関係にあり，他者軽視傾向の高い青年は日常生活の中で精神的に不安定な状態にあることが示されている．

ビッグファイブとの関連

パーソナリティ心理学において，人間のパーソナリティがいくつの次元で説明可能であるかという問題が長く議論されてきたが，近年では 5 つの因子（ビッグファイブ）によってパーソナリティの記述が可能であることが広く知られるようになっている（丹野，2003）．ビッグファイブとは，Extraversion（外向性），Agreeableness（協調性，調和性，愛着性），Conscientiousness（誠実性，勤勉性，統制性），Neuroticism（神経症傾向，情緒不安定性，情動性），Openness（開放性，経験への開放性，遊戯性）の 5 因子を指す．ビッグファイブを測定するパー

ソナリティ・テストのうち，本邦では，FFPQ（Five Factor Personality Questionnaire; 辻 , 1998），主要 5 因子性格検査（村上・村上 , 1997），NEO-PI-R などが多くの研究で用いられている．ビッグファイブを測定するテストの多くは，ビッグファイブ（超特性）がさらに要素特性と呼ばれる下位特性に分類可能であることを想定している．例えば FFPQ では，ビッグファイブの 1 つである統制性について，几帳面，執着，責任感，自己統制，計画の 5 つの要素特性から構成されるものとされ，各 6 項目の計 30 項目の質問から統制性が測定される．従って FFPQ の場合，他の 4 つの超特性をあわせて計 150 項目への回答を対象者に求めることになる．FFPQ に限らず，要素特性を考慮した場合，その分測定に用いられる項目数が増えることになるが，この間，要素特性の測定や判定を目的としない短縮版の開発も進められてきた．特に近年では，10 項目でビッグファイブが測定可能な超短縮版（Ten Item Personality Inventory）の日本語版（TIPI-J）も発表されている（小塩・阿部・カトローニ，2012）．対象者への負担は大きいが精密なテストを用いるのか，または簡単に短時間でビッグファイブの概要を捉えるテストを用いるかは，研究の目的によって使い分けることが推奨されている．

鈴木（2010）はビッグファイブと他者軽視傾向の関連に注目し，FFPQ の短縮版（FFPQ-50，藤島・山田・辻，2005）を用いて検討を行った．その結果，愛着性と負の相関関係，遊戯性と正の相関関係が確認された一方で，外向性，情動性，統制性との関連は有意ではなかった．また，有能感類型による差異を検討したところ，ビッグファイブの全ての特性で有能感類型の効果が有意であった．情動性と他者軽視傾向の間に有意な相関係数が見られなかった点については，一見矛盾する結果であるとしながらも，精神的健康と関連がある自尊感情と他者軽視傾向との間がほぼ無相関であることから，十分に予測可能であることを指摘している．

本研究の目的

以上，一般的パーソナリティと他者軽視との関連については，ある程度共通する知見が得られてはいる．ただし，近年，議論の収束を見せたビッグファイブについては，他者軽視傾向との関連を検討した研究が鈴木（2010）に限られ，その結果の再現性については十分に検討を行う必要があると考えられる．神経症傾向・情緒不安定と関連していたという山田・速水（2004）や高木（2006）に反して，ビッグファイブの情動性と他者軽視が関連しないという結果も，他の指標を用いながら再検証する必要があろう．また，上記の 3 つの先行研究では性差に関する検討が行われていない．仮想的有能感に関する先行研究の多くが性別による差異や効果を考慮しておらず，この点についても検討を行う必要があると考えられる．

そこで本研究では，他者軽視傾向と一般的パーソナリティの関連についてさらなる検討を行うため，①ビッグファイブに基づく鈴木（2010）の検討で得られた結果の再現性について検討すること，②ビッグファイブを測定する他のパーソナリティ・テスト（超短縮版）を用いた場合の結果についてもあわせて検討を行うこと，③性別を考慮に入れた一般的パーソナリティとの関連を有能感類型に基づいた解析を交えて検証することを目的とする．

方　法

調査対象

東海地方の大学に通う大学生 286 名を対象に質問紙による調査を実施した．回答に欠損の見られなかった 281 名（男性 131 名，女性 150 名，平均年齢 18.60 歳）を分析対象とした．

調査内容

質問紙はフェイスシート及び 4 つ尺度から構成されていた．

①他者軽視尺度　速水他（2004）の仮想的有能感尺度 11 項目を使用した．「まったく思わない」から「よく思う」までの 5 件法で評定を求めた．

②自尊感情尺度　他者軽視傾向との組み合わせで有能感類型を判定するために自尊感情尺度を実施した．尺度には，Rosenberg（1965）の自尊感情尺度 10 項目の日本語版（山本・松井・山成，1982）を用いた．「あてはまらない」から「あてはまる」までの 5 件法で評定を求めた．

③ TIPI-J　小塩他（2012）の各 2 項目の計 10 項目でビッグファイブを測定するテストを用いた．「あてはまらない」から「あてはまる」の 5 件法にて評定を求めた．

④ FFPQ-50　藤島他（2005）で作成された FFPQ の短縮版を用いた．ビッグファイブを各 10 項目（5 つの要素特性について各 2 項目）の計 50 項目で測定するテストである．「まったく違う」から「まったくそうだ」までの 5 件法で評定を求めた．

調査時期・倫理的配慮

調査は 2014 年 6 月に実施された．調査対象者に対しては，調査への協力が任意であること，研究目的以外にデータを使用しないことなどが伝えられた．なお，調査実施にあたり，日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会の承認を受けた．

結　果

各尺度の記述統計量

先行研究に従い，各尺度の得点化を行った．各尺度の最小値，最大値，平均値，標準偏差，α 係数を Table 1 に示す．なお，TIPI-J は各 2 項目によって構成されるため，α 係数の欄に逆転処理後の評定値間の相関係数を示した．α 係数は .72 ～ .85 の値を示しており，尺度の内的整合性については問題がないと判断された．また TIPI-J の項目間相関は r=.22 ～ .55 であり，小塩他（2012）の結果（r=.22 ～ .59）とほぼ同程度であった．いずれの指標も十分な内的整合性を有していることが確認されたため，以降の分析に用いることとした．

Table 1　記述統計量（n=281）

		最小値	最大値	平均値	標準偏差	項目数	α係数
他者軽視		11.00	52.00	28.38	7.17	11	.82
自尊感情		12.00	50.00	28.07	7.24	10	.84
TIPI-J	外向性	-4.00	4.00	0.21	2.17	2	(.55)
	協調性	-4.00	4.00	1.11	1.55	2	(.22)
	勤勉性	-4.00	4.00	-1.07	1.68	2	(.30)
	神経症傾向	-4.00	4.00	0.83	1.76	2	(.24)
	開放性	-4.00	4.00	0.24	1.69	2	(.22)
FFPQ-50	外向性	13.00	49.00	30.85	7.03	10	.80
	愛着性	16.00	50.00	35.63	5.88	10	.79
	統制性	11.00	45.00	28.64	6.10	10	.79
	情動性	14.00	50.00	34.76	7.49	10	.85
	遊戯性	18.00	50.00	34.77	5.98	10	.72

※TIPI-Jの括弧は相関係数を示している

尺度得点の性差

性別ごとに各尺度得点平均を求めたのが Table 2 である．性別による差異について t 検定を実施したところ，自尊感情（t(279)=2.37，p<.05），TIPI-J の神経症傾向（t(279)=-3.87，p<.001），開放性（t(279)=3.21，p<.01），FFPQ-50 の情動性（t(279)=-1.99，p<.05）で有意差が見られた．男性は女性と比べて自尊感情，TIPI-J の開放性が有意に高く，TIPI-J の神経症傾向及び FFPQ-50 の情動性が低かった．

Table 2　各尺度得点の性差

		男性	女性	t値
		Mean SD	Mean SD	
他者軽視		28.66 (7.38)	28.15 (7.00)	0.59
自尊感情		29.16 (7.09)	27.12 (7.26)	2.37 *
TIPI-J	外向性	0.18 (2.24)	0.23 (2.13)	-0.17
	協調性	1.21 (1.55)	1.02 (1.55)	1.04
	勤勉性	-0.90 (1.79)	-1.21 (1.56)	1.56
	神経症傾向	0.40 (1.66)	1.20 (1.76)	-3.87 ***
	開放性	0.58 (1.67)	-0.06 (1.66)	3.21 **
FFPQ-50	外向性	31.46 (7.13)	30.32 (6.93)	1.35
	愛着性	35.45 (5.68)	35.79 (6.06)	-0.48
	統制性	28.51 (6.28)	28.76 (5.96)	-0.34
	情動性	33.82 (7.00)	35.59 (7.83)	-1.99 *
	遊戯性	34.32 (5.93)	35.15 (6.02)	-1.17

* p<.05　** p<.01　*** p<.001

他者軽視傾向，自尊感情とパーソナリティとの相関関係

他者軽視得点及び自尊感情得点と TIPI-J，FFPQ-50 との相関係数を算出した結果が Table 3

である．参考までに鈴木（2010）の結果も表中に示した．なお，鈴木（2010）で使用されたのはFFPQ-50であり，TIPI-Jは測定されていない．TIPI-Jの協調性（r=-.18, p<.01），勤勉性（r=-.10, p<.10）及び開放性（r=.11, p<.10）が有意もしくは有意傾向の相関係数を示した．また，FFPQ-50では，愛着性（r=-.27, p<.001），情動性（r=.21, p<.001）との間が有意であり，遊戯性との間に有意傾向の相関係数が認められた（r=.11, p<.10）．有意傾向の相関関係にまで注目した場合，ほぼ先行研究で指摘されている，協調性（愛着性），神経症傾向（情動性），開放性（遊戯性）の3点についてその関連が確認されたこととなる．鈴木（2010）のFFPQ-50を用いた研究と比較すると，情動性での相関係数が本研究で有意であった点で異なっていたが，鈴木（2010）でも有意ではないものの正の相関係数が得られており，先行研究で精神的不健康さと他者軽視傾向が正の相関関係にあることが数々報告されていることも考慮すると，十分に妥当な結果であったと考えられる．

Table 3　各変数の相関関係及び鈴木（2010）との比較

		他者軽視				自尊感情			
		本研究（n=281）		鈴木（2010）（n=242）		本研究（n=281）		鈴木（2010）（n=242）	
		r	95%信頼区間	r	95%信頼区間	r	95%信頼区間	r	95%信頼区間
自尊感情		-.09	(-.21~ .03)	.08	(-.05~ .20)	—	—	—	—
TIPI-J	外向性	-.02	(-.14~ .09)	—	—	.36 ***	(.26~ .46)	—	—
	協調性	-.18 **	(-.29~-.07)	—	—	.20 ***	(.09~ .31)	—	—
	勤勉性	-.10 †	(-.22~ .02)	—	—	.22 ***	(.11~ .33)	—	—
	神経症傾向	.06	(-.05~ .18)	—	—	-.48 ***	(-.57~-.39)	—	—
	開放性	.11 †	(.00~ .23)	—	—	.31 ***	(.20~ .41)	—	—
FFPQ-50	外向性	.05	(-.07~ .17)	.06	(-.07~ .18)	.38 ***	(.28~ .48)	.33 ***	(.21~ .44)
	愛着性	-.27 ***	(-.37~-.15)	-.15 *	(-.27~-.02)	.29 ***	(.18~ .39)	.21 **	(.09~ .33)
	統制性	-.01	(-.13~ .11)	-.02	(-.15~ .11)	.23 ***	(.12~ .34)	.26 ***	(.14~ .37)
	情動性	.21 ***	(.10~ .32)	.10	(-.03~ .22)	-.73 ***	(-.78~-.67)	-.53 ***	(-.62~-.43)
	遊戯性	.11 †	(-.01~ .22)	.22 ***	(.10~ .34)	.16 **	(.05~ .27)	.06	(-.07~ .18)

†p<.10　*　p<.05　**　p<.01　***　p<.001

性別にみた相関関係とパーソナリティによる他者軽視の予測

性別ごとに相関係数を算出したところ（Table 4），TIPI-Jでは男性の協調性との負の相関係数（r=-.25, p<.01）のみが有意であり，FFPQ-50では，男女の愛着性（それぞれr=-.35, p<.001，r=-.20, p<.05）と統制性（それぞれr=-.19, p<.05, r=17, p<.05），情動性（それぞれr=.19, p<.05, r=.24, p<.01）で有意な相関係数が得られた．なお，統制性の相関係数については，男性では弱い負の関連を，女性では弱い正の関連を示していた点が特徴であった．以降の分析は，有意な相関関係が多く確認されたこと，先行研究でも用いられていることなどから，ビッグファイブのパーソナリティ指標をFFPQ-50に絞り，解析を進めた．

Table 4　男女別の他者軽視との相関関係

		他者軽視				自尊感情			
		男性		女性		男性		女性	
		r	95% 信頼区間	*r*	95% 信頼区間	*r*	95% 信頼区間	*r*	95% 信頼区間
自尊感情		-.10	(-.26~ .07)	-.10	(-.25~ .07)	—		—	
TIPI-J	外向性	.02	(-.16~ .19)	-.06	(-.22~ .10)	.32 ***	(.15~ .46)	.41 ***	(.27~ .54)
	協調性	-.25 **	(-.41~-.08)	-.13	(-.28~ .03)	.26 **	(.09~ .41)	.15 †	(-.02~ .30)
	勤勉性	-.16 †	(-.32~ .01)	-.05	(-.21~ .11)	.22 *	(.05~ .37)	.22 **	(.06~ .36)
	神経症傾向	.08	(-.09~ .25)	.07	(-.10~ .22)	-.50 ***	(-.62~-.36)	-.44 ***	(-.56~-.30)
	開放性	.07	(-.10~ .24)	.14 †	(-.02~ .29)	.32 ***	(.16~ .47)	.26 **	(.11~ .40)
FFPQ-50	外向性	.06	(-.11~ .23)	.04	(-.12~ .20)	.34 ***	(.18~ .49)	.41 ***	(.26~ .53)
	愛着性	-.35 ***	(-.49~-.18)	-.20 *	(-.35~-.04)	.34 ***	(.18~ .48)	.26 **	(.11~ .41)
	統制性	-.19 *	(-.35~-.02)	.17 *	(.01~ .32)	.26 **	(.10~ .42)	.21 **	(.06~ .36)
	情動性	.19 *	(.02~ .35)	.24 **	(.08~ .39)	-.76 ***	(-.82~-.68)	-.70 ***	(-.77~-.61)
	遊戯性	.15 †	(-.02~ .31)	.08	(-.08~ .24)	.24 **	(.07~ .40)	.12	(-.04~ .27)

†p<.10　*　p<.05　**　p<.01　***　p<.001

男女の関連の差異を統計学的に検討するため，5 つの特性から他者軽視，自尊感情を予測したパス解析（多母集団同時分析）を実施した．解析には Amos ver. 22 を使用した．結果を Table 5 に示す．他者軽視傾向では，統制性からのパスの推定値のみで男女差が有意であった．男性の相関係数（Table 4）では，統制性は負の相関係数が有意であったが，他のパーソナリティ特性をコントロールしたパス解析では，パスは有意ではなかった．一方で女性では，正の効果が有意であった．

Table 5　パーソナリティによる他者軽視，自尊感情の予測（多母集団同時分析）

		他者軽視			自尊感情		
		男性	女性	推定値の差の検定	男性	女性	推定値の差の検定
FFPQ-50	外向性	.17 †	.17 *	-.02	.04	.15 *	1.33
	愛着性	-.38 ***	-.40 ***	.18	.01	.01	.00
	統制性	-.05	.31 ***	3.05 **	.04	.15 **	1.44
	情動性	.08	.24 **	1.14	-.73 ***	-.65 ***	1.75 †
	遊戯性	.11	.15 †	.24	.24 ***	.09	-1.75 †

†p<.10　*　p<.05　**　p<.01　***　p<.001

※パーソナリティ間、他者軽視と自尊感情の誤差間の共分散を仮定した（飽和モデル）

項目評定との関連における性差

先の性別ごとの相関係数で，TIPI-J では顕著な男女の差異は見られなかったことから，FFPQ-50 に含まれる一部の要素特性との間の関連に性差がある可能性が考えられる．そこで，

Table 6　統制性の項目（FFPQ50）と他者軽視との相関関係

統制性（FFPQ-50）の項目	要素特性	全体	男性	女性
7. あまりきっちりした人間ではない（R）	几帳面	-.05	.15 †	-.22 **
13. 几帳面である	几帳面	.06	.08	.04
5. まじめな努力家である	執着	.04	-.15 †	.22 **
50. 根気が続かないほうである（R）	執着	.07	.19 *	-.02
1. 仕事を投げやりにしてしまうことがある（R）	責任感	.18 **	.27 **	.10
15. 責任感が乏しいといわれることがある（R）	責任感	-.03	.19 *	-.25 **
16. しんどいことはやりたくない（R）	自己統制	.11 †	.12	.10
23. 欲望のままに行動してしまうようなことは，ほとんどない	自己統制	-.07	-.19 *	.06
33. よく考えてから行動する	計画	.19 **	.10	.26 **
49. 仕事は計画的にするようにしている	計画	.01	-.13	.13

†p<.10　*　p<.05　**　p<.01

※（R）は逆転項目であり、統制性得点には逆転処理後の評定が加算されている

統制性の尺度得点ではなく，合算前の項目評定値を用い，性別ごとに他者軽視傾向との相関関係を検討した．結果を Table 6 に示す．男女で相関係数の符号が一致していなかったもののうち，男女いずれも有意もしくは有意傾向であった項目は，「7. あまりきっちりした人間ではない」「5. まじめな努力家である」「15. 責任感が乏しいといわれることがある」の 3 項目であった．特定の要素特性における男女差は認められなかったが，男性は他者軽視傾向が高いほど努力家やきっちりとした人間ではなく，責任感も乏しいと評定する傾向にある一方で，女性では，他者軽視傾向が高いほど努力家できっちりとした人間であり，責任感があると評定していた．

有能感類型によるビッグファイブ特性の比較

続いて，有能感類型（ex. 速水・小平，2006）によるパーソナリティ特性の比較を行うため，他者軽視と自尊感情のそれぞれの平均値をもとに，委縮型（n=83），仮想型（n=73），自尊型（n=72），全能型（n=53）に分類した．萎縮型は他者軽視と自尊感情がともに基準値より低い群，仮想型が他者軽視が高く自尊感情が低い群，自尊型が他者軽視が低く自尊感情が高い群，全能型が他者軽視と自尊感情がともに高い群である．性別ごとに各群の 5 つのパーソナリティ特性（FFPQ-50）の平均値を図示したものが Figure 1 ～ 5 である．FFPQ-50 の 5 つのパーソナリティ特性を従属変数とする性別×有能感類型の二要因分散分析をそれぞれで実施した．

外向性得点の平均値をグラフ化したものが Figure 1 である．分散分析の結果，有能感類型の主効果が有意であった（F(3,273)=12.49，p<.001）．HSD 法による多重比較を行ったところ，萎縮型，仮想型＜自尊型，全能型であった．自尊感情の低い 2 群と比べて自尊感情の高い 2 群で外向性得点が高く，自尊感情の効果によるものであると考えられる．また，性別の主効果及び性別と有能感類型の交互作用は有意ではなかった．

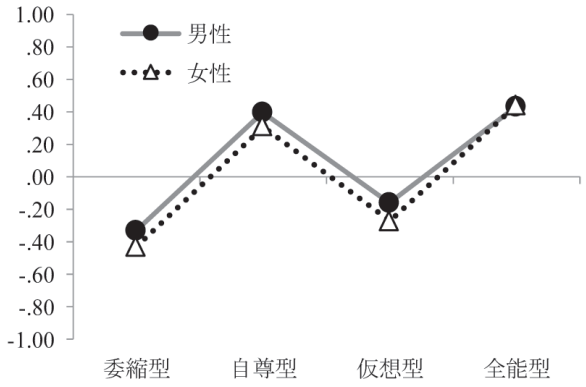

Figure 1　各有能感類型の外向性得点（z-score）

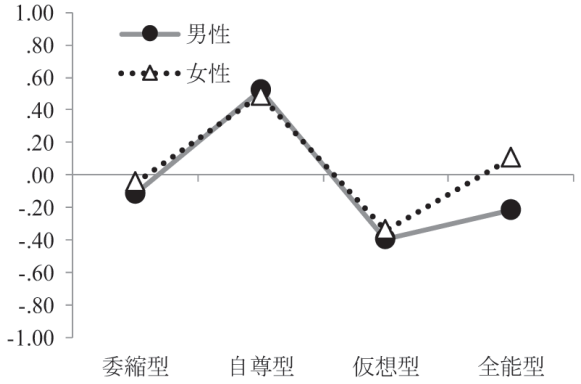

Figure 2　各有能感類型の愛着性得点（z-score）

愛着性得点の平均値をグラフに示したものが Figure 2 である．有能感類型の主効果が有意であった（$F(3,273)=10.45$，$p<.001$）．HSD 法による多重比較を行ったところ，萎縮型，仮想型，全能型＜自尊型であり，自尊型が他の類型より愛着性が有意に高かった．外向性と同様に，性別の主効果と交互作用は有意ではなかった．

統制性得点の各群の平均を Figure 3 に示す．有能感類型の主効果（$F(3,273)=5.93$，$p<.001$）と交互作用（$F(3,273)=3.76$，$p<.05$）が有意であった．交互作用について，単純主効果の検定を実施したところ，全能型における性別の効果（$F(1,273)=7.41$，$p<.01$），男性における類型の効果（$F(3,273)=5.52$，$p<.01$），女性における類型の効果（$F(3,273)=3.85$，$p<.05$）が有意であった．各性別の類型の効果について HSD 法による多重比較を行ったところ，男性では，萎縮型，仮想型，全能型＜自尊型であり，女性では，萎縮型＜全能型であった．

情動性得点の平均値を Figure 4 に示す．情動性では，有能感類型の主効果が有意であった（$F(3,273)=54.08$，$p<.001$）．HSD 法による多重比較を行ったところ，全能型，自尊型＜萎縮型，仮想型であった．外向性得点の傾向と逆であり，自尊感情の低い 2 群と比べて自尊感情の高い群

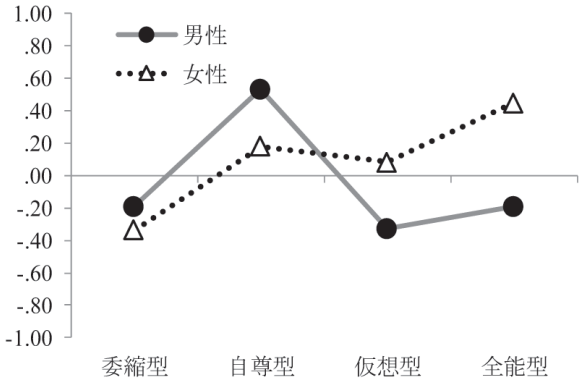

Figure 3　各有能感類型の統制性得点（z-score）

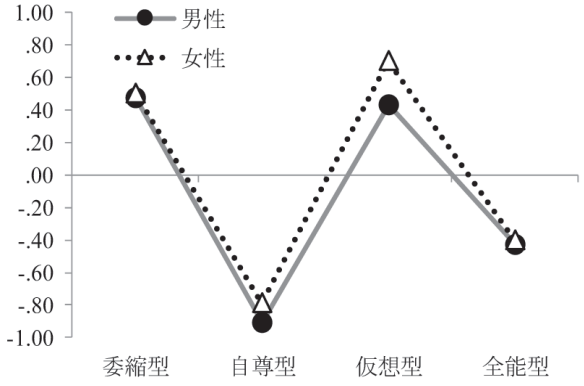

Figure 4　各有能感類型の情動性得点（z-score）

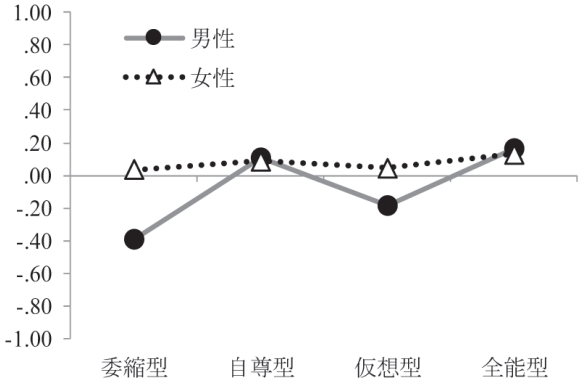

Figure 5　各有能感類型の遊戯性得点（z-score）

で情動性得点が低い得点を示した．なお，性別の主効果と交互作用は有意ではなかった．

遊戯性得点の各群の平均値を Figure 5 に示す．遊戯性では，有能感類型の主効果，性別の主

効果，交互作用ともに有意ではなかった．

考　察

本研究は，他者軽視傾向と一般的パーソナリティとの関連について，①ビッグファイブとの関連に関して鈴木（2010）で得られた結果の再現性について検証すること，②超短縮版のビッグファイブ尺度を用いた検討を加えること，③性別も考慮に入れ，有能感類型に基づいた解析を含めて検証することを目的としていた．

まず，鈴木（2010）の結果の再現性については，Table 3 の結果の通り，他者軽視傾向が愛着性との負の相関関係にあることが本研究においても示された．また，有意傾向ではあったものの，遊戯性との間の正の相関関係についても鈴木（2010）と対応する結果が得られた．つまり，他者軽視傾向が高い青年は，他者との良好な関係を築く傾向が弱い一方で，創造力や思考が芳醇であるという点については，再現性の高い結果であると言えよう．しかしながら，情動性に関しては，本研究でのみ有意な正の相関係数が得られた．鈴木（2010）は情動性に関して有意な相関係数が得られなかった点について，他者軽視傾向が高い個人の中には，自信のある個人とそうでない個人の両方を含むためであろうと述べている．確かに，自信の有無とほぼ対応する自尊感情に注目すると，情動性と比較的強い相関関係にある．分散分析の結果では，萎縮型と仮想型で情動性が高く，自尊感情の低い 2 群で特に精神的健康の状態が芳しくないことが示され，他者軽視の効果は認められていない．この有能観類型による比較結果は，鈴木（2010）でも同じであった．自尊感情の効果を考慮すると，他者軽視傾向と精神的不健康との相関関係は非常に小さなものになると考えてよいであろう．ちなみに，自尊感情の平均値を比較してみると，本研究の対象者は鈴木（2010）の対象者よりも有意に自尊感情の値が低く（$t(521)=2.14$，$p<.05$），わずかながらではあるが，自信のない対象者たちが多く含まれていたようであった．この点が本研究で他者軽視と情動性に有意な相関関係が見られた理由であったのかもしれない．ただし，山田・速水（2004），高木（2006）では，用いたパーソナリティ・テストは異なるものの，他者軽視傾向と精神的不健康との間に関連を見出している．今後，情動性については，自尊感情との因果関係も考慮しつつ，他者軽視傾向が精神的不健康を招くプロセスにも注目して検討を行うことが必要であろう．

第二に，本研究では超短縮版のビッグファイブ尺度である TIPI-J を用いて検討を行った．鈴木（2010）でも用いられた FFPQ-50 は，5 つの超特性を構成する要素特性（下位特性）を配慮して各 10 項目から構成されているテストである．一方で，TIPI-J は簡便にビッグファイブを測定する超短縮版として利便性を追求したテストであり，各 2 項目から超特性を測定する．双方を用いた本研究の結果からは，TIPI-J で，FFPQ-50 と同様に協調性（FFPQ-50 では愛着性）との間に正の相関関係が見られ，開放性（FFPQ-50 では遊戯性）との間の正の相関係数も有意傾向であった．しかし，勤勉性との関連では，TIPI-J でのみ有意傾向が示された．有意傾向では

あるものの，性別の相関係数を確認すると，女性の他者軽視傾向と勤勉性の間の関連において，FFPQ-50 との差異があるようであった．

TIPI-J の勤勉性の項目は「しっかりしていて，自分に厳しいと思う」「だらしなく，うっかりしていると思う」の 2 項目である．例えば，女性でのみ他者軽視傾向と有意な関連を示した FFPQ-50 の項目に「まじめな努力家である」という項目があるが（Table 6），真面目さや努力家といった「執着」の要素特性について TIPI-J では測定しきれていない可能性は否定できない．尺度の利便性と測定範囲の広さや細かさがトレードオフの関係にあることを改めて示した結果であるが，むしろ超短縮版においても他者軽視傾向と協調性（愛着性）との負の関係が示された点は注目すべきであろう．

本研究の第三の目的は，性別による分析を行うこと，また，有能感類型に基づいた分析を行うことであった．以降の分析は FFPQ-50 を用いて行った．性別ごとの相関係数及び多母集団同時分析の結果から，統制性の次元において性差が認められ，女性の他者軽視傾向が統制性と正の関連にあることが示された．この結果は他者軽視傾向と一般的パーソナリティの因果関係のパターンから下記 2 通りの解釈が可能である．まず，他者軽視傾向が統制性に影響を及ぼしていると仮定すると，他者軽視傾向の高い個人の統制性次元の自己認知の歪みであるとの解釈が可能である．高木（2007）や小平・池田（2011）では，他者軽視傾向が高い個人は，自己評価の維持のために，自我関与が高い（自身が重要だと思う）領域において身近な他者よりも自分の能力を高く評価しがちであることが示されている．他者軽視傾向の高い青年たちが，「序列化社会」「競争社会」の中で生きていると認識する傾向が強いこと（小平，2012）を考慮すれば，真面目に努力し，計画的で自己統制ができる人間であると自己認識し，またそのように他者に自己呈示をすることは，他者軽視が高い女性にとって重要であるのだと考えられよう．

もう一つの解釈は，統制性の高さから他者軽視傾向が高められているという順序の因果関係である．有能感類型による統制性の平均値（Figure 3）及び分散分析の結果から，女性の統制性の高さは特に全能型で顕著であった．全能型は，自信があるために他者軽視を行う個人であるとされている．このような類型で統制性が高い値を示したことから，周囲の他者や広く一般の人々の行為の不足が気になることで他者軽視傾向が高まっていると解釈することが可能である．

どちらの解釈が妥当であるかは，そもそも他者軽視傾向と一般的パーソナリティがどのような因果関係にあるかという点において明らかでないことから，判断は難しい．他者軽視傾向もまたひとつのパーソナリティ傾向であり，ビッグファイブの 5 つの特性との因果関係においてどちらかのみが先行するとも考えにくい．相関関係や双方向因果の関係として解釈するのが最も現実的であり，上記のいずれの方向の影響も起こりうると考えてよいであろう．

以上，本研究では，他者軽視傾向と一般的パーソナリティ，特にビッグファイブとの関連について，一部再現性の高い関係性を示すことができた．また，他者軽視傾向とパーソナリティとの関係における性別による差異も浮き彫りとなり，特に統制性において，他者軽視の意味が男女で異なる可能性も示唆された．他者軽視傾向の高い青年は，社会的に決して望ましい状態ではない

ため，一般的に誤解されやすい傾向にある．本研究の結果は，他者軽視傾向が高まる必然性について理解の一助となるものであると考えられる．今後は，他者軽視の生起要因や減少の条件について，さらに検討を重ねていくことが求められる．

引用文献

安藤史高（2006）．自律性欲求と仮想的有能感との関連について　一宮女子短期大学紀要，**45**，121-128.

藤井　勉・上淵　寿（2011）．他者軽視傾向を測定する IAT の作成　東京学芸大学紀要総合教育科学系，**62**，287-291.

藤島　寛・山田尚子・辻平治郎（2005）．5 因子性格検査短縮版（FFPQ-50）の作成　パーソナリティ研究，**13**，231-241.

速水敏彦（2006）．他人を見下す若者たち　講談社現代新書

速水敏彦（2012）．仮想的有能感とは何か　速水敏彦（編）　仮想的有能感の心理学－他者を見下す若者を検証する　第 1 章 1 節，pp. 1-6，北大路書房

速水敏彦・木野和代・高木邦子（2004）．仮想的有能感の構成概念妥当性の検討　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），**51**，1-8.

Hayamizu, Y., Kino, K., Takagi, K. & Tan, E. H. (2004). Assumed-competence based on undervaluing others as a determination of emotions: Focusing on anger and sadness. *Asia Pacific Education Review*, **5,** 127-135.

速水敏彦・小平英志（2006）．仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連　パーソナリティ研究，**14**，171-180.

小平英志（2012）．社会観との関連　速水敏彦（編）　仮想的有能感の心理学－他者を見下す若者を検証する　第 3 章 4 節，pp. 122-131，北大路書房

小平英志（2014）．大学生の他者軽視傾向が政治的自己効力感および政治関与に与える影響　日本福祉大学子ども発達学論集，**6**，1-10.

小平英志・青木直子・松岡弥玲・速水敏彦（2008）．高校生における仮想的有能感と学業に関するコミュニケーション　心理学研究，**79**，257-262.

小平英志・池田安世（2011）．仮想的有能感と自己評価維持：有能感タイプによる検討から　日本教育心理学会第 53 回総会発表論文集，231.

小平英志・小塩真司・速水敏彦（2007）．仮想的有能感と日常の対人関係によって生起する感情経験：抑鬱感情と敵意感情のレベルと変動性に注目して パーソナリティ研究，**15**，217-227.

久木山健一（2012）．社会的スキル　速水敏彦（編）　仮想的有能感の心理学－他者を見下す若者を検証する　第 2 章 3 節，pp. 52-61，北大路書房

村上宣寛・村上千恵子（1997）．主要 5 因子性格検査の尺度構成　性格心理学研究 **6**，29-39.

小塩真司・阿部晋吾・カトローニピノ（2012）．日本語版 Ten Item Personality Inventory（TIPI-J）作成の試み　パーソナリティ研究，**21**，40-52.

小塩真司・西野拓朗・速水敏彦（2009）．潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連　パーソナリティ研究，**17**，250-260.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.

鈴木有美（2010）．『他人を見下す若者たち』の性格的特徴－仮想的有能感と 5 因子性格検査の関連　瀬木学園紀要，**4**，66-71.

鈴木有美（2012）．共感関係を促進する　速水敏彦（編）　仮想的有能感の心理学－他者を見下す若者を検証する　第 3 章 5 節，pp. 131-138，北大路書房

高木邦子（2006）．仮想的有能感と性格－ YG 性格検査と自己認識欲求からの検討－東海心理学会第 55 回大会発表論文集，55.

高木邦子（2007）．仮想的有能感と自他評価－自己評価維持モデルからの検討　日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集，688.

高木邦子・山本将士・速水敏彦（2006）．高校生の問題行動の規定因の検討：有能感，教師・親・友人関係との関連に着目して　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），**53**，107-120.

丹野義彦（2003）．性格の心理―ビッグファイブと臨床からみたパーソナリティ　サイエンス社

辻平治郎（1998）．5 因子性格検査の理論と実際：こころをはかる 5 つのものさし　北大路書房

山田奈保子・速水敏彦（2004）．仮想的有能感と性格検査との関連：16PF との関連から　日本パーソナリティ心理学会第 13 回大会発表論文集，100-101.

山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）．認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，**30**，64-68.